

---

# トランシルヴァニアでのある体験に関するヨーゼフ・Aの手記

ネズ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トランシルヴァニアでのある体験に関するノーザフ・Aの手記

### 【Zコード】

N4455C

### 【作者名】

ネズ

### 【あらすじ】

18世紀初頭。オーストリア人青年ヨーゼフはトランシルヴァニア地方に旅行し、山中で迷った末、城下町にたどりつく。十字架だらけのその町を治める「老伯爵」とは・・・吸血鬼ものです。

(前書き)

吸血鬼ものです。  
女性向け要素を含みます。苦手な方は「」注意下さい。

ジー・ベン・ビュルゲン、この魅惑的な響き！ハンガリーを越えて、いつか旅してみたいと思っていたその地方が、わがオーストリアの統治下に入り、私は念願かなってその国に向かっている。すまぬ、ハンガリーよ、私にはそなたの異国情緒より、さらに向こうの神秘の森のほうが、いつそう麗しく思われる。それゆえ私は、一歩足を踏み入れたなら、其処をその土地の人々が呼ぶように呼ぼう、憧れをこめて、森の彼方の国、トランシルヴァニア、と。

これは、祖父のヨーゼフ・Aの遺品を整理したときに見つけた、古い手記の書き出しである。手記は、愛用の机の引き出しの一つに入っていたのだが、引き出しには鍵がかけられている上、その鍵はなくなっている始末で、およそ物を捨てるということのなかつた祖父らしからぬ状況だつた。引き出しが気になった私は鍵を壊して（針金でつつきまわして）、手記を発見した。残念ながら祖父は文学者でも詩人でもなく、旅行記の中で読んで面白い部分はほんの少ししかないことは、私も認める。しかしある部分だけは、一般的の読者にも十分に興味深いのではないかと思う。ジー・ベン・ビュルゲンという響きに、著者と同じようにロマンティシズムを感じるならば、であるが。

祖父ヨーゼフは1687年生まれ、裕福な商人の三男として多少の教育を受け、その上で一文にもならない学問に自由な時間の大半を費やした。変わった人だつた。

【トランシルヴァニアのある体験に関する、ヨーゼフ・Aの手記】

5月26日

トランシルヴァニア地方を横断して、ブラショフという町にやつてきた。さてここまで来て、後はどうじょうかと迷う。南は、善良なキリスト教徒の敵であるオスマン帝国の属国だ。だから、むろん最初は南に向かうつもりなど毛頭なかつた。しかし私は面白いものを見つけてしまつた。

聖ニコラエ教会で、旅支度をした変わつた集団が司祭の祝福を受けていた。それはいい。旅立つ者が司祭から祝福を受けたいと思うのは自然なことだ。しかし彼らは皆、首から大きめの十字架をさげ、最新式のフリントロック式の銃と剣を持ち、それらを使うことを生業としていると思われるひとびとばかりだつたのだ。興味を引かれた私は教会に立ち寄り、仔細を尋ねてみた。

「彼らはどこへ、何をしに行くのですか。」

正教会に独特的の莊重な服装と風貌の司祭は、その見た目を裏切らなり重々しい聲音で答えた。

「南から来る、悪魔の使いを征伐しに。」

「悪魔の使いを征伐とは。彼らはいつたい」

「近年しきりに、生ける死者が人々を襲います。それは人の血を吸つて生きる呪われた存在であり、その魂なき肉体を地に還すのは教会の責務なのです。あの人々はそうした魔物を斃すことを使命とし、我々はハンターと呼んでいます」

このようなやり取りのあと、私はカルパチア山脈の向こう側へ、冒険行をすることを決めた。

人の生血を吸う生ける死者、すなわち吸血鬼などというのが本当にいるのかどうか、うわさの出所が知りたかったのだ。

6月8日

南のワラキアは、こことおなじ正教の国でありながら異教徒のトルコにくみしている。敵国であるため、国境越えは難しい問題となる。訊ねまわつたが、うまく入りこむ方法はない。ブラショフに来てか

ら2週間もたつてしまつた。ほかに方法がないのなら、仕方ない、少々危険だが、カルパチアのふもとの村で山中から国境を越える道を尋ねようと思う。冒険に多少の危険はつきものだ。丈夫な靴と杖を調達したら、すぐにも出発するつもりでいる。

いまは、トランシルヴァニアの神秘の森より、ワラキアの小暗い背徳の風が私を呼んでいるようだ。

6月12日

今日は疲れた！山越えなど一度と考えまい。不承不承ながら山越えの道筋を教えてくれた村に別れを告げてから、道のか木々の隙間なのか判別のつかないものをたどること、朝からおよそ7時間。日が傾き始めても一向に予定していたアルジエスに着かない。山の中で夜を越す気にはさすがになれなかつた。狼なぞ現れた日には命がない。あせりにあせつて歩を早めた結果、何と運の良いことに、アルジエスではないがどうやら町らしきものが見えてきた。とにかくその町に入り、最初に目に付いた宿屋に飛び込んで、よつやく一息つくことができた。ここは宿は家族で営んでいて、亭主とおかみと、なかなか愛嬌のある娘が、旅人を快く迎えてくれた。

今夜はもう眠ろうと思うが、場合によつては、この町にしばらく滞在するのも良いと思っている。町に入る前に、夕暮れの山あいに黒々と見えた中世的な城、そして町に入つてまず訊ねたこの町の名前。ドラクレア。悪魔の化身である竜の子を意味する町の名が、ひどく氣になる。

6月13日

今朝は、かなり満足のゆく朝食から一日が始まつた。塩味の強い固めのパンにバターとジャム、ポーチドエッグののつたサラダと、上等のソーセージ。その朝食の給仕は例の愛嬌のある娘がしてくれた。疲れもとれ、すつかり元気になつた私はさつそくこの町について情報を集めだした。

「この町はドラクレアというやつだが、なぜ悪魔の名など冠しているのだろう?」

娘は両手を体の前で組んだり後ろで組んだりしながら、知らないわ、昔からそういう名前なんだもの、と答えた。さらに訊こうとする扉が開いてめがねの男が一人入ってきた。大きなかばんを持ち、さらにも多くの荷物を従者に持たせているのを見て、医者だなどぴんときた。病人でも出たのだろうかと思つてゐると彼はすかずかと私の前に来た。

「旅の方ですか。ドラクレアへようこそ。旅の方には無料で瀉血してさし上げることになつてます、いかがですか」  
にこりともせずに放たれる医者の言葉を私はただただ呆気にとられて聞いていた。そんなサービスは聞いたことがない!宿の者たちは驚いた様子もなく遠巻きにして見ているだけだ。私は断つた。

「いえ、結構です。」

医者はやれやれとつぶやいて立ち上がると、入つてきたときと同じように大またで、さつさと出て行つてしまつた。

なんとこう変わつた町だらう。散策に出ると、いつそう奇妙なことに気がついた。立ち並ぶ家々のつくりはごく一般的なものだつたが、どの家も戸や窓に十字の形をした飾りがついてゐる。そういう装飾をつける風習があるのか、それとも非常に信仰深い町なのか。後者の割には教会がさびれているのが不思議だ。町に取り囲まれた小高い丘には何本もの尖塔を持つ重厚な城がそびえたつ。窓の少ない堅固なつくりはやはり当世風のものではなく、中世の衣装をまとつた諸侯や貴婦人にこそ似合わしい。城を訪ねられるだろうかと観光気分で思つたが、城について何も知らないことを思い出し、昼にふたたび宿に戻つた。

昼食は、朝よりも質素だつた。朝食を腹一杯たべたので不満はないが、昼のほうが軽いというのはおかしな感じだ。宿の娘は（月並みにマリアという名だそうだ）私の向かいに座つて油を売り始めた。

「お客様さん、どこから来なすつたの。」

「ウイーンだよ。トランシルヴァニアをずっと旅行してね」「ウイーンですって！都會だわ。すごいのね。身なりもいいし……もしかして貴族様？」

「ただの商人の息子さ。ところでここは、ワラキアの領内かい」娘の質問攻めにあつてはたまらないので、私は逆にこいつらの知りたいことを訊いた。

「ここはまだトランシルヴァニア領よ。でもワラキアのアルジェスの町のほうが近いの。」

話の続きで、トランシルヴァニア側からこの町に来るには、ブラシヨフでなくシビウから来れば山越えにもちゃんとした道があったのだということがわかつた。私のとつたルートは道ではなかつたらしい。

「城は、誰が管理しているのかな」

「城主の老伯爵様とそのご子息が住んでらっしゃるわ。ここには城下町よ」

驚いた。オーストリアの傘下に入つても、昔ながらの伯爵領がそのまま残つてゐるとは。マリアはおしゃべりな質らしく、城についていろいろと話してくれた。

「お城のミフネア様はそれはきれいなかたで、若い娘はみんな憧れてるのよ。」

若い娘の憧れの的ということは、城主の子息のほうにちがいない。

「未来の城主夫人の座を狙つてゐるというわけか」からかつてやつたのだが、マリアはあやふやな調子で、え？ そう、そうかもね、などと煮え切らない反応だつた。からかいがいのない娘だ。城下の住人は一定の税金を納めているらしいが、総じて町は自由で住みやすいところだということだつた。「老伯爵様はうるさいことは何にも言わないので」だとマリアは言つた。

とりあえず城主についてわかつたことだし、午後、城をたずねてみることにした。城の入り口まではかなりの急坂だつた。これだか

ら昔の城というのは。しかし着いてみると、城は意外と開放的だつた。入り口の門番に自分は学者で、城の書籍を閲覧させてほしいのだと言うと、すんなり通してくれた。広々とした清潔で明るい場内には結構な数の男女が楽しげに働いている。案内してくれた四十がらみの男が「書斎に入れるかどうか、ウルリヒ様にきいてみましょう」と言うので、直接お会いできますか、と尋ねてみた。

「ウルリヒ様はこのところ病氣がちなので、なんとも……。」「では、もうお一方の……。」

「ミフネア様に？ それなら、夕方までお待ちいただかなければなりません。でも書斎のことならむしろミフネア様にお聞きしたほうがいいかもしない」

城主親子に対して、ずいぶんくだけた物言いをするものだ。こんな話をしながら立派な階段を上り、一つ上の階の踊り場で左右を見渡した。右も左も長い廊下が続き、部屋数はいくつあるのかもわからない。この階には客室と使用人の部屋があるそうだ。使用人たちがこんな良い場所を占めているというのも聞かない話である。ウルリヒ様の部屋と、もつと上等の客室はさらに上だということだった。私たちがしゃべっていると、まさにその上の階から、六十くらいの高貴な感じの紳士が文中に付き添われて下りてきた。もちろん、これが「老伯爵」ウルリヒである。

「旅の方と聞いたが……。」

ゆっくりとこちらを見た「老伯爵」に、私は一步引いて挨拶をした。「この町は何もないが、静かで良い所。ゆっくり滞在されると良い」「お言葉に甘えて、そのようにさせていただきます。たいそう由緒あるお城のようですね。差し支えなければ書物を拝見したいのです

が

「書物も人に見られてこそ価値があるというもの。どうぞ、存分に」「ありがとうございます」

老伯爵は穏やかで偉ぶったところのない、優しそうな人物だつた。書斎に入れもらつた私は、夕方まで書物に埋もれて過ごした。

蔵書はかなり豊富で、分野も多岐にわたり、中には十一世紀くらいの古いものもあった。ここを出たらもう田にすることはないだろつ、貴重なものだ。伯爵は博学なのだろう。没頭しすぎて、腹時計に気付いたときにはすでに夜の九時くらいになつていて。書斎はもともと薄暗く、ランプの光を頼つていたので、外が暗くなつたのがわからなかつたのだ。急いで本を片付け、遅くなつた詫びと、礼を言おうと思つてウルリヒの居室の方へ向かつた。

そして、私は彼に逢つた。廊下の途中で、私は同じほうへ向かつている人物に行き会つた。身なりのよさから、これが伯爵の子息であろうと、そのときは思った。黒っぽい服装は地味すぎる氣もするが、ちらりと振り向いたその顔に、私は思わず足を止めてしまつた。マリアの言つたとおり、大変な美貌の持ち主だつた。長い睫毛が瞳に影を落とし、細くて真つすぐな鼻梁と形の良い小さな口が華奢な印象を与へ、秀でたひたいに、つやのない黒い髪がふさふさとかつていて。歳は二十六、七だろつか。大理石のような顔色はウルリヒよりも彼のほうが病氣ではないかと思うほど生氣がなく、ひどく愁わしげで、全体に退廃の氣配を漂わせていたが、そのまとう空氣と暗い色の瞳には引き込まれるような何かがあつた。私はとりあえず頭を下げた。

「客人か」

「ヨーゼフと申します。ウルリヒ様にお許しをいただいて、書斎を

お借りしておりました

「許可を得たならば良い」

やわらかく、沈みこむような静かな聲音だ。口数が少ないらしく、彼はそのまま話を終えよつとした。

「ミフネア様でいらっしゃいますね」

彼は「ぐわづかにうなずいただけだつた。私はさらに言葉を継いだ。「遅くまでお邪魔しましたので、ウルリヒ様にお礼を申し上げたいのですが」

「体調が悪いので今日はやめたほうが良い。明日また来なさい」

「ではそうします。」

父の伯爵よりも鷹揚な口の利き方に私は面食らいながら答えた。蔵書をほめると、彼は少し反応を示した。

「四百年も昔の書物を見つけましたが、この城に代々伝わるものですか。」

「その本についてはよく覚えている。ワラキア建国期のある騎士の記録で、当地を訪れたときに見つけ購めたものだ。」

「なるほど」

「ワラキア公国はその後、別の家系がヴォエヴォド（公位）につき、建国の祖であるラドウはほとんど忘れ去られている。報われないものだ。どうでも良いことだが」

「この町は、その頃ワラキアの内だつたのですか」

「ワラキアも、その当時ハンガリー領だつたトランシルヴァニアも、この町を気にかけたことはなかつたと思う。だからどうやらこの町に属していたかは、誰にとつてもどちらでも良いことだ。」

私はこの人物にだんだん興味がわいてきた。この若さで、この老成した口のききようはどうだ。もつと話したかったが、時間も遅いので後日に譲ることにした。老伯爵には礼を言いそこねたので、別れ際に私はこう言った

「お父君によろしくお伝え下さー」

すると彼はきょとんとした顔つきになつて小首をかしげた。何が疑問なのか私にはわからなかつた。彼はすぐに元の表情に戻つた。

「伝えよう

そう言つて、階段の上へ消えていった。遠ざかるとき、足音一つしなかつた。

宿に戻つて、マリアに、城主親子に会つたことを話した。

「伯爵はお加減が悪いと聞いていたが、運良くお会いすることができたよ」

「マリアは変な顔をした。

「お加減が悪いのはウルリヒ様のほうよ。もつとも老伯爵様が元気  
いっぱいだなんて聞いたことはないけれど」

「ウルリヒ様が、伯爵様だろう?」

マリアはぽかんとして私の顔を見つめ、それから、けらけらと笑い  
出した。ひとしきり笑いおさめると、彼女は信じられないことを口  
にした。

「老伯爵様はミフネア様のことよ。ウルリヒ様はご養子で、五十年  
くらい前にミフネア様がお城に連れてらしたんですって。」  
私はこのときどんな顔をしただろう?私の混乱した頭のためにも、  
この日記にメモを残しておく。

老伯爵=ミフネア 子息(養子)=ウルリヒ

このことと、町中の十字架との間に関係があるとすれば、それは  
一つの仮定へとつながる。老伯爵は吸血鬼なのではあるまいか?し  
かし、そうだとしても私の心には恐怖よりも好奇の気持が強い。城  
にはほかにも吸血鬼がいるのだろうか?ウルリヒもそうなのだろう  
か?

そして、伯爵の物憂げな口調とまなざしの理由はどうにあるのだと  
うつ?

6月14日

私ははつきりて調査を開始した。町の人々は、伯爵の正体を知っ  
ているに違いないのだ。まずはマリアに知っているだけのすべてを  
話せることだ。

「マリア。伯爵の不老の秘密を知りたいと言つたら、話してくれる  
ね?」

こう切り出すと、彼女はそわそわした。どうやらよそ者こじや  
べりすぎたと後悔しているらしい。こんな小娘に、どこまで話して  
よいかの分別などつくはずもない。

「あたし、あまりよく知らないのよ。」

「しかしあんなふうにいつまでも姿が若いのは普通の人間じゃない。」

町の人は知っているんだろう？彼が何者なのかを

マリアはついに、年寄りは皆、伯爵様は「ストリゴイ」だと黙つて  
いる、と白状した。ストリゴイというのはこの地方での吸血鬼の呼  
び名らしい。しかし彼女自身は本当にそれ以上知らないようだつた。  
「おじいちゃんならもつと知つてゐると思つわ」と言つので、私は  
その老人に会いに、宿屋の奥へ邪魔をした。

老人は思つたよりすらすらとしゃべつてくれた。彼はまず、ウル  
リヒ様は人間だ、と断言した。そして、子供のころには夜は絶対に  
外に出てはならず、いつも十字架を胸に下げてゐるようと言つて  
いたこと、町中がいつも夜におびえ、たびたび人が襲われる被害が  
出たこと、被害にあつた死者も吸血鬼になつてしまつたため、その死  
体は蘇らないよう心臓に杭を刺して埋葬したが、それは恐ろしい光  
景だつたこと、などを語つた。しかし、いまは城に伯爵以外の吸血  
鬼はおらず、被害もないのだと語つた。そういえば、城では人間がお  
おぜい働いていた。彼は言つた。

「城に人間の奉公人があがるよになつたのと、町から吸血鬼が減  
つて安全になつたのはわしが十歳くらいのことだ」

老人の年齢は六十過ぎと思われ、したがつて、それは半世紀くらい  
前の話だらう。老人が言つには、最初に奉公にあがつた人たちなら  
当時のことを詳しく知つてゐるだらうが、もう八十歳くらいになつ  
てゐるだらうから、生きているかどうかわからない、とのことだつ  
た。

私は、伯爵自身は血を飲まなくて平氣なのか、と訊いてみた。する  
と老人はとたんに口のよう口を閉ざしてしまつた。なにか、かば  
いだつするよくな氣配が感じられた。重ねて訊くと、彼はいかにも  
自分の口から言つうのだけは避けようとする感じで、毎週城にあがる  
医者がいるからその医者に聞けとだけ言つた。

老人の話も気になつたがひとまず置いておくことにして、午後は  
ふたたび城に登つた。口実のように書斎に寄り、日暮れを待つてウ

ルリヒの部屋へ向かう。口のあるうちに行つても伯爵は現れないだろつからだ。私はよほど興味津々の様子だつたのだろうか。ウルリヒは（やはり具合が悪いらしく、ベッドの上だつた）私を見るなり、城下で何か聞かれましたね、と言つた。あいかわらず品の良い、穏やかな感じだつた。しかし、伯爵に比べるとずいぶん腰の低い話し方だ。昨日はたいして気にならなかつたのだが、伯爵の鷹揚さのほうがより貴族的であるように思われた。ウルリヒは、もとは貴族ではなかつたのかもしれない。

「伯爵はあなたではなく、ミフネア様だと」

ウルリヒは少し真顔になり、ミフネア様にお会いしたのですか、と訊ねてきた。私が返事をしようとしたとき、部屋のドアが開いて当の伯爵が音もなく入つてきた。

「その人は私に『お父君によろしく』と言つた」

彼は別に気分を害したようでもなかつたが、私は丁重に頭を下げた。『昨日は失礼いたしました。お分かりいただけると思いますが、あなたがご子息のほうだと勘違いを』

「早とちりなことだ」

彼はそう答えてウルリヒの傍に腰を下ろした。なんだか眠たげでなげやりな様子の彼は微笑ましく、私はおかしくてならなかつた。

「ところで客人には、わが書斎がお気に召したようだな」

伯爵は私に書物の話を促した。私は2、3の本について、その書かれた年代や内容の重要性を強調しながら意見を述べた。伯爵はどの書物のこともよく記憶していく、手に入れた経緯まで話してくれた。自分の正体を隠そつという気はないようだつた。

「書物の多くは私が集めたものだ。私とウルリヒの他にはほとんど読む者もない。好きなだけ使いたまえ」

伯爵はウルリヒの手に触れ、眼交わしながら言つた。二人は実に仲が良いようだつた。親子と言つには何かしら違和感があつた。そうこうするうちに、ウルリヒがちょっと咳き込んだので、病人を疲れさせてはいけないと想い、退出することにした。伯爵はウルリヒを

気遣い、子供にするよつに布団をかけてやつていた。

6月15日

午前中、例の医者のところへ行つた。宿の老人が言つていた城の主治医とは、私がここで最初に迎えた朝、瀉血サービスに来たあの無愛想な医者だつた！私が行くと、用件を察したらしくものすごく迷惑そうな顔をした。

「伯爵のことならしゃべらんぞ。」

何も言わないぞとばかりの態度なので、私は正面から訊かず、やんわりと別の話からはじめた。

「伯爵様の正体を探るうと、このではあります。ウルリヒ様は、お加減が悪いのですか。」

医者は眼鏡を上げ、お会いできたのかね、珍しいことだ、と言つた。彼の話では、ウルリヒは近頃、寝たり起きたりの状態で、自分の見立てではもう長くはないだらうと、さらに彼は

「ウルリヒ様が亡くなりでもした口には、この町もまだどうなることやら。」

とぶつぶつ言つ。それはどういうことかと私は問い合わせた。すると医者は咳払いしてごまかそうとし、かえれかえれ、話すことなど何もないと繰り返した。

「隠さなくとも、もう聞いてしまいました。伯爵様は吸血鬼だと。町の者はみな知つているようですね。でも被害はないと言つ。伯爵様は人間の血がなくても平気なのですか。」

知つていることを一息に並べ立てるに、医者は、ごまかしきれないと観念して話し始めた。

「そんなわけがなかろつ。伯爵にはわしが毎月、町の者たちから瀉血した血を持つて行く。」

ここではじめて、瀉血を持ちかけられた理由がわかつた。

「むろん、たいした量じやない。水差しに半分程度だ。人間ならば栄養失調になるくらいの充足度であろうよ。しかしそれで何とか人

を襲うのを我慢できるのだそうだ」

「なぜ伯爵はそんな無理をしているのでしょうか」

「知らん。伯爵がそうするようになつたおかげでわしらは安心して暮らせるよつになつた。ウルリヒ様が城に来たころからそつたのだ。その前は伯爵も人間の血を啜つて暮らしていた。」

「だから、ウルリヒ様が亡くなつたらどうなるのかと心配されるわけですね」

「そういうことだ。」

医者は、これ以上はわしは知らん、当時城に奉公していた人でアンナという婆さんがいる、興味があつたら聞いてみるがいい、とだけ言つて、腹が痛いと駆け込んできた男を診るために私を顎で追い出した。

例によつて午後は城を訪ね、書斎を借り、ウルリヒの病を思い、医学や薬草の本を手に取つた。体力をつけるような薬でもあればと思つたのだ。しばらくそんな本に埋もれていると、夕方、思いがけず伯爵が書斎に現れた。私の見ている本を覗き込み、いつものように静かな調子で私に話しかけた

「君は医者なのか」

私は伯爵に興味を持つてもらえたことを嬉しく思つたが、残念ながら医者ではないのをそのように答えた。

「医者ではありません。医学もかじりはしましたが」

一瞬の沈黙のあと、彼はあらためて私に言った。

「もしウルリヒを助ける方法があるのなら、何でもやつてもらいたい」

この言葉の中には、かすかにおびえているよつな響きが感じられた。伯爵は心から物を頼む人がよくするように、私の手をそつとつかんだ。私はつかまれた手の冷たさに驚いて思わず手を引っ込めてしまつたのだが、伯爵の暗い色の瞳がゆっくりとこちらを見たので、そんなぶしつけな反応を示したことを後悔した。吸血鬼の体は死者の

それだ、当たり前ではないか。私の不用意な態度が伯爵を傷つけたのではないかと思うと気になつて仕方がない。

しかし、伯爵はウルリヒを死なせたくないと思いながら、なぜウルリヒを自分と同じ吸血鬼にしてしまわないのだろうか？

6月16日

たらいまわしにそれでいてる氣もするが、医者の言つていたアンナというもと奉公人に、会いに行くことにした。

アンナは、宿の爺さんの言つたとおり八十を越えているであろう。しかし語り口はしつかりしていて、若いころはきびきびした人だつたのだろうと想像された。彼女は、この婆の話をお聞きになりたいとか、伯爵様にじかにお会いしたんじや無理もないこと。それにしてもあるお医者様も口の軽い人だこと、といいながら私に椅子をすすめた。

「たいそつ長い話ですからね、お茶でもないと最後までは聞けませんよ」

私の前には紅茶と焼き菓子が出てきた。

「今から五十年以上も昔、この町の門は常に閉ざされておりました。用事のある者以外は外に出ることもできず、人々は教会と十字架だけを心の頼りに、閉鎖的な生活を続けていたのです。夜には家の戸をかたく閉ざし、決して出かけようとはしませんでした。それでも、うつかり外で夜を迎えてしまった者は、多くの場合、朝には死体となつて発見されました。行方知れずになつた者もありました。彼らがどこへ行つてしまつたのか、私たちは知つていました。当時のお城は」

アンナは身を乗り出して聞いていた私にお茶を飲むように手振りですすめた。

「動き回る死者たちの巣窟でした。百人よりもっと多くの吸血鬼たちが、伯爵様の下にいました。彼らはお城に住み、夜になると町や

周辺の森に出てきて、不運にも彼らの目にとまつた人間たちの血を啜り、自分たちの仲間を増やしていったのです。彼らに殺された人間が魔物としてよみがえるのを防ぐには、なきがらの胸を杭で打つか、すつかり燃やしてしまわなければなりませんでした。私たちはすいぶん用心して暮らしておりましたが、被害を完全に食い止めることはできませんでした。なぜなら

私は生睡とともに菓子のかけらを飲み込んだ。

「娘たちは自分の部屋の窓辺に伯爵様が来ていると、すすんで迎え入れたからです。伯爵様はあの通り美しくて、魅惑的な優しい声で、みんなぼうっとなってしまうのです。

けれどもお城にいる他の吸血鬼は伯爵のことをとても恐れています。おそろしい魔物たちでしたが、伯爵は彼らを簡単に消し去ってしまうことができるので、皆、伯爵の命令に逆らうことはありませんでした。町の人々もまた、伯爵をもつとも恐れています」

今この町からは想像もつかない。何より伯爵が人間を襲うところが想像できなかつたが、伯爵に惑わされる人々の気持はわからないでもなかつた。夢見がちな年頃の娘ならばなおのこと無理もない話であろう。

「ウルリヒ様は五十五年前、どこからか伯爵様が連れて来られたのです。十歳でした。もちろん、私たちがそのことに気付いたのはしばらくたつてからでした。お城の御用商人が、人間の子供がいるらしいと話していました。同じころ、伯爵は城下に三か条のおふれを出されました。一つめは城中の者は民に危害を加えてはならないこと。二つめは城下のすべての家は出入口と窓に十字架を掲げること。そして三つめは、外出時は必ず十字架を携行すること、でした・・・

」

続いた話はなかなか壮絶で、伯爵は命令に従わない吸血鬼たちを片端から肅清したことだった。アンナの兄弟は夕刻に出歩いて危うく殺されるところを、伯爵自身に助けられたのだそうだ。

「兄たちは青くなつて逃げ帰つてきましたが、集まつてきた魔物た

ちは伯爵様の手であつて、いう間に切り裂かれてしまつたと言つておりました。伯爵様は兄たちに早く帰れとおっしゃつたそうです。その話を聞いて以来、私は、伯爵様は本当はいい方なのではないかと思つようになりました。そのうちに、お城にいた吸血鬼はだんだん数が減つて、ついには伯爵様以外誰もいなくなりました。夜に外出することさえ普通のことになりました。

お城にいるところの子供はどうやって生活しているのかしらと気になつてきたやさき、お城では執事や召使の募集を始めました。その子供、ウルリヒ様のお世話をする人間を雇うとのことでした。もちろん皆、最初は怖がつてお城に行こうとしませんでした。でも、お城にはもう、伯爵様とウルリヒ様のほかにはせむしの下男しかいなくなつていましたし、昼間だけの勤めで良い上、ご奉公のお給料がとても良かつたので、二十人ほどの就職希望者が集まりました。私もこのときお城にあがつたうちの一人でした。』

アンナは熱いお茶を淹れなおしてくれた。この先の話はとても込み入つて長いので、要点だけまとめることにする。

アンナたち「就職希望者」が最初に城に行つたのは伯爵からの指定により未明の時刻だつた。城の玄関口を見下ろす大階段の上に姿を現した伯爵は、自分には人間を襲うつもりがないこと、だが念のため首の詰まつた服を着、必ず十字架を持つて城に来ること、ウルリヒは人間で、伯爵の養子であり、将来はこの城を継ぐのでそのつもりで仕えてもらいたいこと、などを皆に話した。

『私の世話は必要ない。日のあるうちは地下の棺で寝ている。ただし城が荒れないよう、よく働くように』

伯爵が言つたのはそれだけだつた。この言葉から、吸血鬼が昼間は活動できることと、棺を寝る場所にしていることがわかる。集合時間として夜明け前を指定したのも、人々に不安を与えない為だろう。彼が現れたときには息を呑んで固まつたアンナたちも、魔物とは思えない行き届いた、理性的な人物像にすっかり安心し、また、

際立つた美貌に男女ともに驚嘆したという。その後ウルリヒにもひきあわされ、利発な、健康な人間の子供であることがわかつて、全員が城で働くことに決まった。

その後半年ほどの間、城での勤めは平穏に続き、城の中の部屋を好きに使ってよいと言われたこともあって（伯爵は使うあてのない部屋など、使用人に使わせてもかまわなかつたのだろう）、次第に夜も城に残るようになつた。伯爵は毎夜、ウルリヒに会いに来、たまにひとりで入浴したり、書庫にこもつたりしているだけで、ほかの人間たちとは顔を合わせようとしなかつたが、話す時には親切で穏やかであり、女中たちの中には伯爵に憧れを持つものもいた。しかし、ある日事件が起つた。

女中の一人が廊下を歩いているとき、伯爵はその首に咬みつこうとしたのだ。だが、彼は必死で自制し、ふらついてその場に倒れこんでしまつた。女中たちが慌てて近くの部屋に運び込んだが、その日、彼は眼をさまさなかつた。アンナたちは城下の医者 例の瀉血の医者だ に相談し、栄養失調だろうと推測した。水差し半分の血の献上はこのときから始まつたらしい。伯爵が、倒れるまで血を絶つて耐えていた話が伝わると、住人は一様に伯爵に同情するようになつた。人々は相談して当番制で血を献上することを決め、以後、この方式で落ち着いたようだ。また、アンナを含む女中たちは、すんで伯爵の身のまわりの世話をすることを申し出た。なんといつても城主なのだし、一人で何もかもするのはおかしい。もちろん、吸血鬼である伯爵は食事をしないので、世話を言うのは灯りを持つて歩くとか、着替えや入浴を手伝う程度のことだつた。

「私たちは競つて伯爵様の傍にいたがりました。もちろん、伯爵様はかしづかることは当然に受け止めていらっしゃいました。ミフネア様はお顔だちだけでなくお体もとてもきれいで、手を触れるのがもつたいないくらいで、私はいつも緊張したものです」

私は思わず想像してしまつた。書斎で私の手に触れた滑らかな白い肌をした手からすると、他の部分も同じように白く滑らかに違ひな

い、などと考へて、服の下の体を想像するなどまったく無礼極まりないことだと慌てて想像を振り払つた。

そうして平穏な日々が続き、十数年が過ぎると、人間であるウルリヒはすっかり大人になつた。そろそろ奥方を迎えるころだらうと言われていたが、ウルリヒはアンナたちにもたびたび、自分は結婚する気はないと漏らしていたそうだ。

アンナは言つた。

「養子ということを気にしてらつしやるのだと、私たちは思つていました。今でも皆、そう思つてゐるでしょう。でも私は聞いてしまつたのです。あの日、伯爵様はいつものようにウルリヒ様の部屋にいらしていました。私はいつものようにお茶を持つていきました。でも、お部屋の扉の前で私は思わず足を止めました。部屋の中からは、真剣な声で何か話しているのが、切れ切れに聞こえていました。

「彼女に聞こえたのはほとんどウルリヒの言葉だけだつたそつだ。

『あなたを愛しています。あなたは私の父などではない』

『・・・』

『そんなことはどうでも良いのです。私が欲しているのはあなただけです、あなたのすべてです。』

『私は・・・おまえを・・・』

私は自分がどんな顔でこの話を聞いていたのかわからない。

「何かのわずかな物音がしました。それから、ミフネア様の、いけない、というお声と、ウルリヒ様の高ぶつたような声と。私は、そつとその場を離れました。それ以上聞いてはいけないと思って。けれど、私が廊下を曲がるとき、ドアが開いて、ミフネア様が走つて向こうへ去つていくのが見えました。伯爵様があんなふうに取り乱すのを見たのは、後にも先にもこのときだけでした。』

その次の夜、アンナは伯爵が思いつめたような顔でウルリヒの部屋の前に立つてゐるところに鉢合わせた。なぜなら毎晩ウルリヒの部屋にイヴニングティーを運ぶのが彼女の仕事だつたからだ。伯爵は

ティーワゴンの上のリネンを見て、明日の夜、きれいなやわらかい布を持ってくれるよとにアンナに頼み、ついにその日はウルリヒに会わなかつた。

「翌日の夜、私は言われたとおりきれいな布を用意して、部屋の外で伯爵様にそれを渡しました。受け取るとき伯爵様の手は少し震えていました。緊張したような顔をしていらっしゃいました。そして部屋にお入りになり、私はなぜか泣きたいような気持になつて急いでそこを後にしました・・・」

どう差し引いて考えても、これは一人がそういう仲になつたということだろう。彼らがひどく親密で、親子にしては不自然な寄り添い方をしていたのも納得がゆく。だが、その行為はいったい何重の禁忌を犯していることになるのだろう？私は気が遠くなりそうだった。

「伯爵様はとても長いあいだ生きてきた方です。そんな方が扉の前で戸惑いこわばつていました。それでも自分から戸を開けて入つて行かれました。伯爵様はきっとその時あらゆる決意をされたのでしよう。」

部屋はすっかり暗くなつていた。私は礼を言つて外に出た。見上げると城はまったく静まり返つてゐるようだつた。伯爵はウルリヒに愛されそれを受け入れた。伯爵はすなわち死なぬ死者であり、寿命がない。ウルリヒの命は明日をも知れず、そして伯爵は彼を仲間にする気はない。伯爵がウルリヒを仲間にしない理由も、倒れるほど我慢してまで血を絶つた理由も私にはわからないが、ウルリヒが死に掛けている今の状況は、伯爵にとつて苦しいものに違ひない。伯爵は、見ず知らずの平民の、医者でもない私に、ウルリヒを助けてほしいと言つた。しかしこの町はひどく中世的で、良い薬もなさそうだ。一度シビウの町に出て、なんとか薬を求めてみようと思う。

6月21日

シビウに着いた日（今度はちゃんとした道を通つた）、ウイーンの実家に手紙を出した。ウルリヒの症状をできるだけ詳しく書き、

良薬を探してシビウまで至急送るようにな頼んだ。しかし何日かかるか見当もつかない。一日でも早く何か届けば良いのだが。

6月23日

ウイーンからの便りはもう待つまい。私はどうやら滋養をつけるには最適という薬草・・・草ではないのかもしないが何かを干して粉にした薬を手に入れた。教会の裏にある薬草園の作男がそんなものを持っていた。彼は、自分は回教徒だったのだと言つた。改宗してここにいるのだそうだ。その昔トルコにいた時に、市場で異民族（彼の言う異民族というのがどのあたりの人々のことを指しているのか、私にはわからない）から買つたということだつた。それを売つていた男はその薬を服めば体の弱つた人間もすっかり元気になると保証したらしい。

この薬が効くのかどうか定かではない。だが迷つてはいる時間はない。明日、さつそくドラクレアに向かおう。

6月26日

私は戻ってきた。だが町に入つてすぐ、何かが変わつたと感じた。人々の緊張した表情が気になつた。それに見知らぬ人間が歩いている。剣をさげ、最新式の銃を持つた数人。それを率いているのは羽根のついた帽子をのせた見るからに立派な身なりの騎士<sup>ヒヤツ</sup>、いや、本当は聖職者なのかもしれない。彼らの会話の中に「b i s e r i c a<sup>カ</sup>（教会）」という言葉が聞こえたからだ。それどころか、私は彼らをどこかで見たことがあるととつさに思つた。そうだ、初めてここに来る前にブラシヨフで見かけた武装した集団。南から来る悪魔の使いを征伐しにゆくのだと、魔物を斃すことを使命とし、ハンターヒトヘル<sup>ハンターヒトヘル</sup>と呼ばれる人々だと聞いたはずだ。

私は身震いを禁じえない。あの伯爵が今、どんな悪行をしていると云うのか。しかも彼は無力だ。あの城には門番以外には番兵すらない。最新式の銃の前で何ができるか。しかも門番はすでにハン

ター団の側に秘密に雇われているのだという。城に行こうとしたら、その門番に押しとじめられた。ハンター団は教会の命を受けており、逆らえば異端とみなされるからというのだ。私は薬の包みを握りしめて焦つたが、どうにもならなかつた。

しかし町の人々はいまの統治が続くことを望んでいるのではないか。皆が口裏を合わせて伯爵の正体を隠し通せばハンターたちは去つて行くだろう。私は町の人々が伯爵に恩義を感じていると信じる。

6月27日

私はとても不安だ。町の人々に、伯爵の秘密を守ろうと呼びかけてみたが、誰もはかばかしい返事をしない。マリアをはじめ宿の皆は自分たちから何か言うつもりはないが、教会の名において真実を語れと言われれば、従うしかないという。

「そはつけないわ。」

教会に逆らって異端者になれば地獄に落ちる

私はこの町に来て、税金の安さに、人々の生活の自由さに本当に驚いたのだ。ヨーロッパ中のどこに行つても、貴族は平民を自由にでき、たとえ殺しても罪にさえならないのが普通だ。なのにここでは人々が何を言つても伯爵は決して怒らなかつたし、城を皆に開放してさえいた。民にとつてこれほど住みやすいところはないだらう。にもかかわらず、誰も伯爵のために口をつぐもうとしない。何事も起らなければよしと望みながら、異端のレッテルを恐れてハンターたちを敬う。

失望した気分で宿に戻ると、ハンターの一人と行き合つた。その男は夕闇の城を見上げて剣の柄をぎゅっと握つた。かちやりと金属の音がした。私はぞつとした。彼らは確信したのだ。明日はどうしても城に行かなければならない。

8月26日

6月28日、29日の事をまとめて書く。あまりにも多くのことがあって混乱し、とてもすぐには書けなかつた。夢だったのだと思おうともした。しかし何もかもがあまりに胸に迫り、あそこから遠く離れたウイーンの自宅で何事もなかつたように生活していても、まるで昨日のことのようだ。それに忘れたくはないのだ。なぜなら・・・いや、それを白状するのはすべて書き留めてからにしよう。

そういうして城を訪ねられずにいるうち、ウルリヒの死が報じられた。27日の深夜に伯爵にみとられて自室で息を引き取り、28日朝に発表された。薬は、間に合わなかつたのだ。私は落胆した。マリアは、ハンターたちがウルリヒ様は殺されたのではないかと疑つてはいる、と耳打ちした。私は日暮れを待つてとにかく急いで城に向かつた。前日までは門で止められたのにこの日は人がいなかつた。城の中にも人影がなかつたが、そのときは気づかなかつた。誰もない城は急に荒れた感じがした。私はまっすぐウルリヒの部屋に向かつた。ほかの場所に彼がいるとは一瞬たりとも思わなかつた。

伯爵はそこに、思つたとおりの様子でいた。眠つているようななきがらの傍に、彫像のよう立つてはいた。声をかけると、ああ、と返事をしたがこちらを見はしなかつた。私はかまわず近づいた。遠慮すべき人などいなかつたからだ。

「ウルリヒ様にさし上げるために薬を求めていたのですが間に合はず、お役に立てなかつた。残念です。」

伯爵はベッドの脇に立ち尽くしたまま、

「そうか。手間をかけた。だがどうでも良いことだ」と言つた。その諦めきつたような言葉に余計にすまないことをしたと思つた。しばらくの沈黙の後、静けさに耐えかねて、

「これから、どうするのですか」「これから、どうするのですか」と訊いてみた。自分で何を訊ねているのかよくわからなかつた。

なんとなく、城の跡継ぎとか、そんなことを訊いたつもりだった。

「どうもしない。明日は葬儀で・・・私が出られるよう夕方行つことになつてゐる。あとは」

伯爵の声は無感動だつたが、急に途切れた。彼は息をつがずに呴いた。

「どうしたら良いのだ」

声の調子は乱れない、しかしそれは絶望的に響いた。私は伯爵の顔を盗み見て、それからその視線を追つてウルリヒの上に目を移した。彼は人間で、だから死に、その結果、伯爵は立ち尽くしている。私は訊かずにはいられなかつた。

「なぜウルリヒ様を仲間にしてしまわなかつたのですか」

伯爵はゆつくりと首をめぐらせて私を見た。その瞳は相変わらず暗いままだつた。私は、伯爵は問い合わせてくれないだらうと思ったが、彼は静かに語り始めた。

「かつて、私は美しい女を幾人か愛した。愛し、欲するままに手に入れた。そうすれば彼女たちは私に従うよくなつた。女たちは愛を告げると喜んで私に首筋を差し出した。だが、配下になつてしまふと生きていたころに美しいと思つた瞳は空ろになり、私に関心すら失つて血を求めて彷徨うだけになつてしまつ。・・・私が望みを達すると彼女たちは私を忘れる。私はそのたびにつきの女を探した」  
伯爵は遠くを見るような目をした。

「美しい女が好きだつた。その美をあがめた。それは宿命的に欲望を伴い、私の欲望は美を破壊した。ジレンマに陥つた。私はやがて、自らの欲望を遂げるべきかどうか悩むようになり、一人の女を口説き落として愛を語ることに時を費やすようになつた。しかし、最後には抑えきれずに首筋を咬んでしまう。結末はいつもおなじだつた。

「私は書斎に心理学や思想の書がたくさんあつたことを思い出した。あれらは伯爵の自己分析の名残だと思われる。」

「ウルリヒの母は、アルデアルで最高の美女だつたと思う。土地の裕福な商人の愛人だつた彼女に想いを寄せ、何か月も通つた。ずっと欲望をこらえ、今度こそ真実の愛をかちえたと思った。けれどもやはり耐え切ることができなかつた。」

伯爵はかすかに身を震わせた。悲しみのためか、恐ろしいことを思い出したからか、はかり知れない。

「配下になつた彼女はウルリヒの血が飲みたいと言つた。やさしく美しかつたはずの婦人が息子の血を啜るさまは考えただけでも醜悪だつた。私はその見るに耐えない事態をふせぐため、彼女を消した。」私は、怖くなつた。人間を配下にすることが」

口調は相変わらず淡々としていたが、伯爵が右手を少し動かしたので、その手で心臓を抉つたのがわかつてしまつた。おぞましい行為のはずなのに、私が伯爵の横顔に感じたのは悲愴感だけだつた。

「愛した女の心臓を握つて、私は多くのことを疑問に思つた。なぜ彼女は、とりわけ息子の血を望んだのか？なぜ私はその美を愛した女の血を望むのか？満たすと同時に失つてしまふのなら、何の為に望みを持つのだろう？」

彼は虚空に問い、答えがないのでそのまま話は終わりそうになつた。私は続けるよう促した。

「その疑問は解けたのですか」

「いいや。…彼女が消滅した後、私は手を洗つてウルリヒを迎えた。正妻が愛人の所生の長男を疎んでいることから、母を失えばウルリヒはその町に居場所がないと知つていた。」

なぜウルリヒを迎えたのかとは聞けなかつた。伯爵はごく自然なことのように話したので、その行動には理由などなかつたのかもしれない。

「ウルリヒには、お前の母は消えた、と教えた。」

「ウルリヒ様に、彼女を手にかけたと知られたくないなかつたからですか」

「私が手にかけたとき彼女はすでに人間ではなかつた。死んだとい

うのは正確ではないから消えたと言つた。・・・些細なことだ。私はウルリヒに、あげられるものは何でもあげる、明日からの居場所も、と言つた。ウルリヒは私の手をとつた。つれてゆくために抱き上げたとき、その温かさにふれて、何があつてもウルリヒだけは咬むまいと誓つた。」

なぜか絶望的な響きをまた感じた。城につれてきてからしばらくの間、ウルリヒの世話をびつこの下男（当時はその男が城で唯一の人間だった）がしていたようだ。

「ウルリヒが配下の者に襲われないよう、城下で人間を襲うことを禁じた。間違いが起こってはならないから私は誰よりも早く起き、遅く寝た。従わない城の者達を消してしまうことはかまわなかつたが、そのうち城の管理をする人手にも困るようになつてしまつたので、城下から人間を雇い入れることにした。私は平氣でも、まだ子供だったウルリヒには世話をする者が必要だつたからな」

これはアンナの話してくれたとおりだつた。私はまた訊いた。

「あなた自身は人間を・・・襲いたくはならなかつたのですか」どうも伯爵に吸血鬼としての習性を訊くのは気がひけたが、知りたいことは山ほどあつた。

「抑えられないほどではない、たいていの場合は。しかしあまり長いあいだ血を絶つていたのでだんだん体が重くなり、飢えに苛まれるようになつた。あるとき、思わず侍女の一人に咬み付こうとしたのだが、ウルリヒの母のことが急によみがえつてきて、恐ろしくなりわけがわからなくなつた。氣を失つたのだと思つ」

「血を絶つと、死ぬのですか」

「死にはしない。ただ、体が冷たく、重くなり、動けなくなる。消滅するかもしれない」

「冷たく？」

「この体は冷たい。だから生きた人間の熱をいつも欲する。少しの間でも、体を温めたいのだ。その後、人間たちが新鮮な血を持つてくるようになったので、動くことくらいは支障なくできるようにな

つた。彼らも、仲間が殺されるよりはいいと思つたのだろう

伯爵は自分の行動が人々に敬意を抱かせたことなど知らないようだつた。知つてもなんとも思わなかつたのかもしない。そして同様に、人々が自分を裏切つてもなんとも思わなかつたのかもしなかつた。

「7、8年してウルリヒが大人になると、城下の施政をさせるようにした。人間のウルリヒが治めるほうが民もよからうし、私は飽き飽きしていた。ウルリヒは頭が良かつたから、通商だの町の整備を熱心に行つて、何年かすると町は以前より豊かになつた。私は興味がないので何もしなかつたが、評判が良くなればウルリヒの為には良いだらうから、町の発展は喜ばしいことだと思つていた。

そんな頃、侍女の誰かがウルリヒにもそろそろ奥方が必要だと言い出した。確かに城には女主人がいたほうが良いのかもしないと思つた。ウルリヒにもそう言つた。良いと思う娘がいたら結婚すれば良い、城下にいなければ他所を訪ねて探しても良いと。しかしウルリヒは結婚など考えたこともないと言つた。私は城の者たちから成年の男は婦人を求めるものだと聞いて、ならばウルリヒにも必要だらうと考えて勧めたのに」

それはそうだらう。二十歳を越した男がちつとも婦人と触れ合わずに生活するのは不自然だ。

「確かに大人になれば婦人を愛し、また肉体的にも求めるのが普通です。修道士などは別ですが、我慢を重ねると気持がすさみ健康も損なうものです」

私は人間の男の代表のような気持でそう説明したが、伯爵は聞いていいなかのよう無関係に話を続けた。

「ウルリヒは、わたしを愛していると言つた。わたしが母を殺したことを探つていたにもかかわらず」

私はウルリヒが伯爵と母のいきさつを知つていたことに驚いた。では、ウルリヒの告げた愛はなまなかなものではなかつたのだ。

「そしてわたしを欲するといった。私にはそれがどういうことかわ

からなかつたのだが、「

伯爵は目を閉じ、何かを思い出すように少し顔を上げた。

「私を抱きしめてキスをした。ウルリヒの腕も体も唇もひどく熱くて、口の中に舌を入れられてわたしは物が考えられなくなり、もう少しでウルリヒの舌を咬んでしまうことになった。ひどく驚いて、私はウルリヒを突き放した。」

びっくりした時の話をこんなふうに落ち着いて話すのは何だか滑稽だと思いながら、私は笑えなかつた。話を続ける伯爵の口元を見つめながら、そのキスの感触を想像し、私は自分がウルリヒになり替わつたような錯覚を覚えた。なお悪いことに、その錯覚にすすんで意識をゆだねた。

「ウルリヒは言つた。『私をあなたと同じ体にしてください。私はずっとあなたのそばにいたいのです』と。しかし私は拒否した。ウルリヒを、彼の母のようにしたくなかった。ウルリヒが私と同じよう冷たくなり、かつての女たちのように空ろになつて私から去つていつてしまふのが嫌だつた。だが彼はあきらめようとしなかつた。私が昔、あげられるものは何でもあげると言つたことを憶えていて、私をほしいと言つて・・・自分の言葉に酔つたようになつて私を引き寄せてどこといわず触つた。・・・熱い手で触れられて私はまた貪欲な気分になつてきた。再び突き放して外に出たが、その晩、私は塔の上で夜通し悩んだ。あの熱い手に触れられたいと望みながら、それをすればウルリヒを咬んでしまうことがわかつていて。どうすれば咬まずにすむか、そればかり考えていた。きっかけは忘れたが自ら口を塞いでしまえば大丈夫だと思った。やや不安に思いはしたが、ある夜、布を持つてウルリヒの部屋に行つた」

伯爵は自分が何をしゃべっているかわかつているのだろうか。私はすでに言葉もなかつたが、聞いて想像するだけで体が落ち着かない感じになつてきた。伯爵はその静かな口調で語りながら一つ一つ、その感覚を思い返していたのだろう。交わした言葉を一つとして忘れていなかつたのだろう。

『これで私を縛るが良い。そうすればお前を咬ままずにすむ』

『嫌です。そんなことをするくらいうなら、無理は言いません、今までどおりお傍に』

『触れて欲しいのだ、その手で。一度きりでなくずっと、お前の熱が欲しい。』

ウルリヒは伯爵の口をその布で猿轡をかませるよつにして塞ぎ、抱き上げてベッドへ運んだ。伯爵はその行為を語るのに羞恥すら感じていよいようだつた。ほとんどうつとりと、と黙つても良い顔をしていた。それが返つて痛々しかつた。私は喉が痛くなつてきて、ただ耳を傾けていた。

「私はウルリヒのその部分の熱さと固さに驚いた。私の体はそういう反応を示さないので、そんな風になると思つてもいなかつた。ウルリヒははじめ私のことも反応させようとしてしきりに触れていたが、そのうち気づいたようだつた。それでも彼は止めることなくあるとこにに急に指を入れた。痛みに耐えかねて布の下から叫ぶと今度は唾液で指を濡らしてしばらく慣れさせてからウルリヒのそれをそこに入れた。はげしい痛みと熱さにそのまま消滅するかと思つた。」

「・・・痛いとか熱いだけ、だつたのですか」

「そうだが。人間は何か別のことを感じるのか？・・・そんなことはどうでも良い。私は」

私はひどく打ちのめされた気分になつた。伯爵はウルリヒのしたこの意味をちつともわかつていなかつた。私は大声でそうではないと言いたくなつた。

「どうでも良くなどない。まさか、ウルリヒ様があなたに痛みを与える為にそんなことをしたとでも」

「ウルリヒは、私に何かを与えたかったのか？私は、ウルリヒはそうしたいからするのだと思つていた」

私は言葉に詰まつた。何かが違うのだが否定もできなかつた。

「たとえ私を苦しめる為にそうしたのだとしても良い。熱い腕に包

まれ、熱いものを体に入れられて私はひどく昂ぶり、一時だけではあつたが田ごろの冷たい飢えを忘れ去つた

思い出すように田を細める顔を見て、ますます何も言えなくなつた。

「わたしは、血を貪る以外の方法で熱を感じることができるので知つた。どちらかと言うと体はむしろ重くなつたが、私はもうウルリヒの温もりなしではいられなかつた」

痛みは耐えられるからかまわないのだ、と伯爵は言つた。痛いからといってどうなるわけでもない、と。

「本当に体が裂けてしまつたとしても死ぬわけではない。ただ裂けたままになるだけで、だから痛みなどは比較的どうでも良いのだ」また喉が詰まる。やはり吸血鬼の体は死体なのだ。傷は癒えない、快感もない。たとえば手足がもげても死にもしないが治りもしないのだ。それでも傷ひとつないところを見ると伯爵はそれなりに用心してやつてきたのだろう。その彼が痛みに耐えても得たかったのは何か？ 痛みよりも耐えがたいそれまでの日常とはどんなものだつたのか？

「あなたは愛を求めたのですね。」

「愛を求める？ わたしはただ、温もりに惹かれただけだ」

私の言葉は伯爵に通じなかつた。彼にとつて、愛とはかつての女たちに感じた「美への愛」のことらしい。しかし彼は、ウルリヒのことは「無しではいられない」と言つたのだ。その感情の意味もわからず、ウルリヒの気持も知らず、すべて欲望のための行動としてしか捉えられず、それでいて、ウルリヒを失つて伯爵に残つたのは空虚と絶望だけだつた。私は何か言わずにいられなかつた。失つた人に替わつて誰かが・・・たとえば私が・・・

「もしあなたが、誰に関わらず生きた人間の熱に惹かれるのであれば、行きずりの誰かにも、同じように求めることが可能である。」

伯爵はちょっと考えて、

「いや。私はそうしたいとは思わない」

と答えた。私は、今度は自分が、などと言い出しかけたことに自分

であきた。しかも誰でも良いような言い方をしたことに自分で嫌気がさした。伯爵にその意味が通じなかつたことだけが救いだ。

どこかで鳥が鳴いた。朝が近づいているのだと思った。

伯爵は話のあいだじゅう、一步も動かなかつた。

階下にかすかに足音がしていた。聞き間違いかと耳をすませたが、物音は遠ざかるどころかだんだん大きくなってきた。荒々しい足音、ドン、ドン、という打ち付けるような振動。ぱりぱりと不吉な音がして、城の扉が破られたのがわかつた。ハンターたちは人のいなくなつた城に襲撃を始めたのだ。私は夢から覚めたように辺りを見回した。夜の闇が青く薄れてきていた。伯爵は私のほうを見た。

「君が呼んだのか」

「とんでもない。私が町に戻ってきたときにはもういたのです」「変わらぬ沈み込むような調子に微塵も怒りは感じられなかつたが、なぜか疑いを晴らそうと懸命になつた。

「彼らの狙いはあなたです、伯爵。」

「そうだろうな」

伯爵はまるで他人事のようだつた。

「彼らはウルリヒ様の死もあなたの仕業だと思い込んでいる。ここに踏み込んできたら遺体に杭を打つ氣でしょ。」

「それはだめだ」

静かに、しかし思いもかけないすばやさで伯爵は私を通り過ぎ、ドアに向かつた。

「私が説明してこよ。」

「危険だ」

「話をするだけだ。君は」

伯爵はウルリヒに目を向けた。

「傍についていてくれ」

そう言って出て行つてしまつた。私はその場から動くことができなかつた。ハンターと伯爵の間に入つて楯になる勇気はなかつた。

少しして、階下の人が何か騒いでいるのが聞こえた。伯爵の声は聞こえず、やがて、数発の銃声と、「魔物め！」という叫びがあがつた。いくつかの物音がした。最後の物音は重いものが落ちるような音だった。何があつたのだろうか、伯爵は討たれたのだろうかと、私は凍りついたようになつた。それからの数秒は百年にも感じられたが、まもなく伯爵は窓から入ってきた。今思えば飛んできたに違いないのだが、その時はそれどころではなかつた。いつの間にか明るくなつていた。伯爵は朝の光を浴びて重そうに体を引きずり、ベッド脇へ戻つた。腕に傷があつたが血は流れていなかつた。おそらくもともと血が通つていないからだろう。それでも私は動搖した。

「怪我をしている」

うわずつた声でそう言い、側にかけよつた。

「やつらは私の話を聞こうとしない。」

伯爵の声は震えていた。それは怒りだつたのだろうか？ 傷が痛んだからだつたのだろうか？ それとも恐れの為だつたのだろうか？

「通路の一部を塞いだが、じきにここへ来るだろう。」

先ほどの落ちるような音は通路を塞ぐ仕掛け扉の音だつたようだ。私は伯爵を逃がさねばならないと思つた。

「逃げて下さい。いまならまだ逃げられる。」

伯爵はゆるく首を振つた。ああ今でも思い出せる。まるでそこに縫いとめられてでもいるかのように膝を折り青白い手を床について、私に嘆願するような目を向けていた。

「私はどこにも行かない。…君の事を、捕らえた人間と言つておいた。やつらが来たら、ウルリヒは人間だと説明してほしい」手を伸ばして机の引き出しから小さな剣を取り出し、私に差し出した。

「これで私を刺すのだ。心臓の場所はわかるのだろう？」

なんと残酷なことを彼は言つたのだろう！ 私は受け取るのを夢中で拒否した。伯爵の胸にそれを突き立てるなど恐ろしくてできないと思つた。何が恐ろしいのか？ 誰かを刺しころすことが？ かれがしぬ

「…」

「できない、人を殺すことなど私には」

伯爵は淡々と返したものだ、

「人ではない。生きていないのでから殺すことにもならない。さあ私は無言で、必死に首を横に振った。伯爵はそんな私をしばらく眺めて剣を下ろし、燃えつきかかっている、火のついたろうそくを床に落とした。火は敷物を焦がし始めた。伯爵は体の向きをかえて剣をウルリヒの手に握らせ、その手を自分で握った。私は震える声で訴えた。

「あなたが死ぬことはないんだ、伯爵。」

「死にはしない、消えるだけだ」

「あなたは充分に長い間、善いことをしてきた。なのになぜ責められる」

そういうと彼の暗い色の瞳がもう一度私を見た。

「なぜ？ 善いこと？ 誰に対しても？」

伯爵の視線はすぐにはいと遠ざかっていった。

「どうでも良いのだ。階下の者たちがわたしのことを何と言つて責めようと、今までしてきたことが善きことであるつと悪しき」と  
であろうと、町の人間がわたしが消えてどう思おうと。」

敷物をなめながら炎が広がつてゆく中で、私は呆然と立つたままだつた。伯爵は私に背を向けたまま無感動に呟いた。

「そして君がそこに突つ立つて焼け死のうと、走つて逃げ出そうと、どちらでも良いことだ。」

どうでも良いといわれたことがショックだった。彼は私のことなど、はじめから終わりまで本当にどうでも良かつたのだ。

伯爵は切つ先を胸に向けた。彼はもうウルリヒしか見ていなかつた。私は部屋の外へ走り出した。彼が塵になるところなど見届ける気にはなれなかつた。だから、わたしが最後に見たのは刃がその胸を深く貫き、ウルリヒに折り重なるように倒れてゆく光景だつた。

城は焼け落ちた。貴重な数々の書物も灰になつた。焼け跡からはウルリヒのものと思われる骨が見つかり、それは棺に納められて教会の墓地に埋葬された。

わたしはそんな心無いことをする人々に嫌気がさし、ドラクレアを後にした。帰路のトランシルヴァニアの記憶はほとんどない。

あれから2ヶ月がたつても私の心は悲しみにふさがれたままだ。伯爵を救うことができるなら救いたかった。もう一度会えるなら私は異端に落ちてもかまわない。告白しよう、私は彼を、「老伯爵」ミフネアを、愛しかけていたのだ。吸血鬼あれ、伯爵に魂がなかつたなどとはとても信じられないで、私は彼が、神の目を逃れたどこかで、彼の望んだウルリヒと一人だけの安らぎを手に入れたいることを願つた。

…願つた。

あれから十二年がすぎた。私は今も伯爵のことを考える。

出会つたはじめから、伯爵が何もかもに、どうでも良い、と言つていたのは、長い時間を過ぎてきて全てに飽いていたからではなく、愛する人が、いや、彼にとつて唯一の存在が、命の瀬戸際にあつたからであると、私は確信する。いつたい誰が、わが全てである人が死にかけているときにはかまつていられるだろう。

のこと。私が最も怖気をふるつたのは、伯爵の青ざめた顔色や冷たい手などではなく、また考え方によつては死姦ともいえる吸血鬼と人間の肉体関係でもなく、半世紀もの間、文句のない善政を享受しておきながら、町の住人たちが残酷な狩をだまつて眺めていたことだ。しかもかれらは全てが終わつた後、何食わぬ顔をしてハ

ンターたちに礼まで言ったのだ。

ほんの数日あそこにいただけのよそ者がそれを憤るのはおかしなことだらうか？伯爵ならそんなことされ、どうでも良いというのだろう。

それにしてもウルリヒは、伯爵に恋しているといいながら自分の人間そのものの欲望を彼に向け、それどころか、心まで食らい尽くしてついに彼を消滅させてしまった。

欲望にかられ、本能のままに他者を貪っていたのは少なくとも伯爵ではあるまい。彼は誰よりも理性的で心の穏やかな人物だった。

伯爵。あなたは一度も私を名前で呼ばなかつたし、私もあなたの名を口にしたことはなかつた。でも今一度だけ、あなたが愛する人にそう呼ばせていたように、私にも呼ばせてほしい。

・・・ミフネア。

## (後書き)

あるミュージカルを見て、吸血鬼を題材に書いてみようと思い立ちました。

が、そもそも吸血鬼についてあいまいな知識しかないことに気づき、民俗学的吸血鬼、文学的吸血鬼について数冊の本を読み、ルーマニアの歴史について調べ、吸血鬼文学の代名詞『ドラキュラ伯爵』を読み、・・・結果、都合の良いところだけ作中に使いました（すみません）。

調べ物の成果はとにかく、ディテールに生きてあります。

話の筋はロマンス（B」ですが）、しかし視点は第三者に置く、という試みもあります。手記形式もはじめて用いました。

ヨーゼフは18世紀の知識人らしく、大いに理屈っぽく考へているつもりでどこかまが抜けています。行動の伴わないへたれなのですが、本人は気づいていません。名前は、オーストリア人としてありがちな名前を選んだ結果、ヨーゼフになりました。「A」は・・・考え付かなかつたのでアルファベットのトップを・・・（ひどすぎ）吸血鬼たるミフネアの最期は無力です。魔物という存在よりも人間の敵意や欲望のほうがずっと恐ろしい、そんなイメージで書きました。

暇つぶしにお楽しみいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4455c/>

トランシルヴァニアでのある体験に関するヨーゼフ・Aの手記

2011年1月6日14時24分発行